JICA筑波
PROFILE

「世界への想いがつながり、実る場所」
JICA筑波

国際協力をしているジャイカの施設がつくばにあるのはなぜ？そんな疑問をお持ちの方も多いと思います。

JICA筑波には、実験室や圃場等を含む研修施設、180名余りを収容できる宿泊施設があります。筑波研究学園都市にある研究機関等のご支援もいただきながら、国づくりのリーダーとなってゆく途上国の行政官・技術者に対し、農業や防災分野を含めた人材育成を行い、知日派・親日派の拡大に取り組んでいます。施設内には、地球上で起こっている様々な問題や開発途上国の暮らしを学べるような展示コーナーや図書室、世界各国の料理が楽しめるレストランもあります。

また、茨城県と栃木県の地域の皆様とともに、開発教育支援、JICAボランティア、草の根技術協力、民間連携などの取り組みを拡充するとともに、近年では、SDGs推進、外国人材の受入や多文化共生支援にも注力しています。さらには、共創と革新で途上国の農業分野の課題解決に取り組む「農業共創ハブ」といった新たな挑戦にも取り組んでいます。

茨城県・栃木県の皆様がもつ平和で豊かな世界への想いを、一人でも多くの方につなげ、共に実らせられる場所となることを目指してゆきます。

JICA筑波　所長

JICA筑波の多様な共創パートナー

		地方自治体の皆様	NPO/NGO、大学、教育機関の皆様	研究機関の皆様	民間企業の皆様	海外現場での国際協力に関心のある皆様	日本国内での国際交流に関心のある皆様
P05	JICA研修事業（知識共創）	●	●	●			●
P07	開発教育支援事業		●				●
P08	JICAボランティア事業	●	●		●	●	●
P09	草の根技術協力事業	●	●		●	●	
P10	民間連携事業				●	●	
P11	外国人材受入れ・多文化共生社会構築に向けた取り組み等	●	●		●		●
P12	農業共創ハブ・農業農村開発人材アカデミー	●	●	●	●	●	

※上記表は一例です。これに含まれない共創パートナーの在り方についても、柔軟にご相談させていただきます。

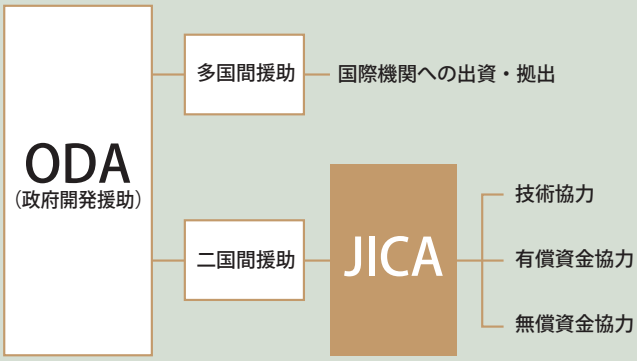
ODAとJICA

日本は、1954年、開発途上国の社会・経済の開発を支援するために政府開発援助（ODA：Official Development Assistance）を開始し、2024年で70周年を迎えました。

JICAはODAのうち、二国間援助の「技術協力」「有償資金協力」「無償資金協力」※を一元的に担っています。世界最大規模の二国間援助機関であるJICAは、約100ヵ所の海外拠点を窓口として、世界の約150の国・地域で事業を展開しています。

また、全国15ヵ所で「JICAの顔」として多様な業務を行う国内拠点は、日本国内の地域と開発途上国の結節点としての大切な役割を担っています。市民、NGO、地方自治体、民間企業等、多様なアクターと共創しながら、地域の特色を生かした国際協力を推進し、地域の発展に貢献しています。

※外交政策の遂行上の必要から外務省が実施するものを除く。



JICA筑波の沿革

昭和36年（1961年）
茨城県内原に茨城国際農業研修会館が開設。のちに海外技術協力事業団（OTCA）「内原国際農業研修センター」となり、開発途上国人材向けの農業指導が始まる。

昭和55年（1980年）
現在のJICAの前身である国際協力事業団の国内8番目の国際研修センターとして「筑波インターナショナルセンター」が筑波研究学園都市の南部（つくば市高野台）に設立。翌年、「内原国際農業研修センター」が 同エリアに移転され、「筑波国際農業研修センター」と改名。

平成8年（1996年）
「筑波インターナショナルセンター」と「筑波国際農業研修センター」が統合され、「筑波国際センター」（現JICA筑波）が発足。

JICA筑波組織概要

【名称】

独立行政法人　国際協力機構　筑波センター（JICA筑波）

Japan International Cooperation Agency Tsukuba Center（JICA TSUKUBA）

【所在地】

〒305-0074　茨城県つくば市高野台3-6

【連絡先】

Tel ／ 029-838-1111（代表）

E-mail ／ tbictad@jica.go.jp

【公開情報】

▼Website　▼Facebook　▼JICA筑波へのアクセス

地域の窓口

JICA筑波は茨城県つくば市にオフィスを置き、栃木県と茨城県にJICAデスクとして国際協力推進員を配置しています。国際協力事業やJICA筑波との連携にご関心をお持ちの方は、お近くの窓口にお気軽にご相談ください。

JICA栃木デスク

栃木県国際交流協会内

（栃木県宇都宮市本町９番14号

とちぎ国際交流センター）

Tel ／ 028-621-0777

E-mail ／ jicadpd-desk-tochigiken@jica.go.jp

JICA茨城デスク

茨城県国際交流協会内

（茨城県水戸市千波町後川745

ザ・ヒロサワ・シティ会館分館2階）

Tel ／ 029-241-1611

E-mail ／ jicadpd-desk-ibarakiken@jica.go.jp

JICA筑波

茨城県つくば市高野台3-6

共に耕し、共に学ぶ

JICA研修事業（知識共創）

60年にわたって世界の国づくりの担い手を育成

JICA筑波では、世界100ヵ国以上から、年間800人以上の行政官、技術者等を受入れ、知識の共創を通じて技術研修を実施しています。敷地内にあるほ場、温室、実習施設を用いた農業研修では、種まきから収穫後処理まで、8～10ヵ月の生産工程を長期間で実践的に学ぶことができます。他にも、筑波研究学園都市に所在する研究機関と連携し、防災、地理空間情報、気候変動対策、教育分野を中心に年間80コース以上の研修を実施しています。

開発途上国から参加する各国の研修員は、個別の技術を学ぶだけでなく、政府機関、自治体、大学、公益法人、民間企業、NGOなど多方面の協力を得て、日本の開発経験やノウハウも学びます。習得した知見や技術を自国の開発課題の解決に生かすべく、研修講師の指導のもと、課題への対応策や帰国後の活動について共に検討します。研修員同士、また日本側関係者との議論やコミュニケーションを通して相互に学び、共に発展する関係を築くことができることも、JICA研修の醍醐味です。

帰国後にスリランカで野菜直売所を始めました

私はスリランカのスシルです。研修で訪問した茨城県牛久市の農産物直売所ポケットファームどきどきに感銘を受けました。日本から帰国後、800万スリランカルピー（約400万円）の資金を確保し、市役所や地元の青年会の協力を得て、直売所を開設しました。生産者も消費者も共に喜ぶ直売所となることを目指しています。

「2022年度小規模農家の生計向上のための野菜生産技術コース」に参加したスリランカ出身のスシルさん

野菜栽培技術を学ぶために来日したアジア・大洋州からの研修員たち

JICA筑波の実験室での陸稲の病気を調べる顕微鏡実習

アフリカ地域から自国の栄養改善に取り組むために来日した行政官による学校給食体験

地域の大学と連携して開発途上国のトップリーダーを育成

JICA筑波では、海外から修士・博士課程で学ぶ留学生の受け入れ支援を行っています。茨城県・栃木県の大学・教育機関の協力のもと、欧米とは異なる日本の近代の開発経験と、戦後の援助実施国（ドナー）としての知見を学ぶ機会を提供し、各国の未来と発展を支えるリーダーとなる人材を育成することが狙いです。留学生は主に開発途上国の行政官や研究者であり、その研究分野は人文社会科学、公共政策や農業、工学、環境科学等、多岐に渡ります。

2年間以上にわたり日本で学ぶ留学生に対して、JICA筑波は、域内特有の開発経験を学ぶ「地域理解プログラム」、近隣地域の行事への参加や学校との交流の機会を提供しています。JICA留学生が茨城県・栃木県の国際化・異文化理解促進に貢献するとともに、留学生たちが日本文化や日本人の姿勢を学ぶことで、いずれは知日派・親日派となって日本との架け橋になることを目指しています。日本企業でのインターンシップの機会を提供しているプログラムもあり、留学生が開発途上国での事業展開を検討する日本企業との橋渡し役として活躍することも期待されています。

「将来は日本とサモアの架け橋になりたい」
筑波大学で勉強中のJICA留学生

私は2022年にJICA留学生としてサモアから来日したグラシアです。現在は筑波大学の修士課程において、医療分野で人体の治療に用いられるバイオマテリアル（生体材料）の研究をしています。母国から遠く離れて最初は心細さを感じましたが、日本で多くの人々に出会う中で日本人の礼儀正しさや優しさに触れ、日本が大好きになりました。帰国後は日本で学んだ技術や知識を、研究開発の面からサモアの発展のために役立てたいと思っています。

同じ研究科の学生とともに筑波実験植物園を訪れたグラシアさん

そば打ち体験などの地域活性化のノウハウを学ぶ中南米の研修員

土砂災害対策に取組む技術者の砂防現場視察（栃木県日光市）

「地域理解プログラム」に参加し、栃木県内のいちご農家で栽培技術の説明を受けるJICA留学生

世界を知り、考え、行動する

開発教育支援事業

学校や地域での国際理解教育や主体的な学びの実践に

JICAは、小中高～大学生の皆様、そして地域に暮らす方々が、開発途上国の課題や世界と私たちの繋がりを知り、世界の課題をジブンゴトとして感じ、考え、自ら行動を起こすきっかけとなることを目指し、いくつかの教育プログラムをご用意しています。海外に行かなくても、知らない国の文化や生活の話をきいたり、外国の人と交流したり、日本と開発途上国のつながりを学ぶことで、あなたにできる国際協力を見つけてみませんか？

JICA筑波では、「施設訪問プログラム」の他、JICAボランティア経験者や、JICA職員、JICA研修員を講師として学校等に派遣する「国際協力出前講座」、高校生や大学生・大学院生が集中的に国際協力を学べる「国際協力理解プログラム」も行っています。他にも、国際理解教育を学校で実践したい教員の方を支援する「国際理解教育実践セミナー」や「教師海外研修プログラム」もあります。年に数回、地域住民や小さなお子さまが気軽に参加できる特別イベントや企画展示も行っています。

世界を体感！JICA筑波の施設訪問プログラム

JICA筑波では、開発途上国の暮らしの現状や、地球が抱える問題、国際協力の実際などを、見て・聞いて・さわって体験できる展示、開発途上国での活動体験談、農業実習施設の見学を組み合わせたプログラムを実施しています。国際理解教育だけでなく、キャリア教育、グローバル人材育成の一助として、学校の社会見学や修学旅行、教員研修等でもご活用いただけます。

各国・地域の風土や文化を感じられる世界民族衣装の試着体験をする高校生たち

「国際協力出前講座」の依頼をうけ、学校で自身の開発途上国での体験談を披露するJICA海外協力隊経験者

国際協力や開発援助の仕事に関心のある高校生・大学生を対象に、体験型のプログラムを提供

自身の所属する学校での開発教育実践のため、教員向け海外研修に参加する栃木県の小学校教員

いつか世界を変える力になる

JICAボランティア事業

開発途上国での経験が、多様化する日本のチカラになる

JICAのボランティア事業では、自身のもつ技術・知識・経験を「開発途上国の人々のために生かしたい」と望む方（20～69歳）を募集し、JICA海外協力隊として開発途上国へ派遣しています。派遣されたJICA海外協力隊員は、原則として2年間、現地の人々と共に生活し、働き、同じ言葉を話し、相互理解を図りながら課題解決のために取り組みます。

1965年の事業開始以来、これまで全国で累計約5万5,000人を派遣。茨城県からは累計約1,200人、茨城県、栃木県から、それぞれ約1,200人、約780人が世界へ飛び立ち（2024年1月末現在）顔の見える国際貢献の担い手として活躍してきました。JICA海外協力隊の、言語、文化、価値観などの違いを超えて、信頼関係を築いてきた経験は、日本の地域社会にも役立つことが近年注目されており、茨城県・栃木県でも、多くのボランティア経験者が、日本国内の地方創生や多文化共生のために積極的に活動しています。

今ではコスタリカは私にとって第二の故郷です

派遣中は文化の違いや言語で悩む事もありましたが、現地の人々に支えられ、2年間ボランティア活動を続けることができました。帰国後は作業療法士を続けながら、コスタリカの障がい者グループを支援するための事業「NatuRica（ナチュリカ）」を立ち上げました。コスタリカのコーヒーやチョコレートの輸入販売を通じて、自分も周りも幸せにする活動を続けていけたらと思っています。

コスタリカの特別支援学校で作業療法士として活動した、茨城県守谷市出身の大島愛さん

エジプトの女性に刺繍や布小物作りなど洋裁を指導する、栃木県宇都宮市出身の浅川純子さん

ニカラグアの小学校で算数の授業を行う栃木県佐野市出身の永倉草さん

ボリビアで保健師として活動する中山美由紀さん、帰国後は茨城県下妻市で多文化共生に取組む

国際協力を日本の文化に

草の根技術協力事業

「世界のために何かしたい」その熱意を応援します

JICAは、NGO、自治体、大学、民間企業などの様々な機関と協働し、開発途上国の現状を広く国内で伝え、また市民による国際協力活動が途上国の人々に届くプロセスを支援しています。そのひとつである草の根技術協力事業は、幅広い業種の団体が参加でき、各団体の熱意やそれぞれがもつ技術・知見をいかした提案をもとに、JICAとの共同事業として実施されます。

茨城県・栃木県ではすでに30以上の事業が実施されており、アジア、中南米、アフリカ地域等において、農業・農村開発、女性のエンパワーメント、医療人材育成、廃棄物処理などの分野で、各国や日本国内で技術指導などの国際協力が行われています。JICA筑波では、途上国支援への一歩を踏み出したい、より規模の大きな活動に挑戦してみたい、自治体の強みを世界に生かしたい、といった様々なニーズに合わせた支援メニューを複数用意しており、情報提供だけでなく、事業の形成や計画・実施にあたっての側面支援を行っています。

求められるのは現地の人々と根気強く向き合う姿勢

中南米地域のエルサルバドルを対象に活動を行う茨城県つくば市のNPO法人イフパット。現地に暮らす女性や青年たちが、自分たちの意思で身の回りの生活課題を解決できるようになることをねらい、生活改善ファシリテーターの育成や家庭訪問、サークル活動を通した学び合いの場の提供を行っています。個人レベルでの意識改革や行動変容により長年の悩みを自身で解決できた時、成果の喜びは大きく、自信がつき次の一歩に繋がります。

以前は字が書けなかったが、プロジェクトを機に練習を重ね、自分のイニシャル3文字が書けるようになった女性（写真右）、普及員（写真左）は励まし共に笑い合う

研修で茨城県笠間市を訪れたベトナムソンラ省のフウオンさんとフォンさん、村の将来の特産について、花卉栽培を勉強中

栃木県芳賀町にあるドンカメ社が、本事業を活用し東ティモールに建設したエコステーション（ごみ集積所）

救急車がすぐ出動・病院に搬送できるよう、筑波大学らがラオスに導入した救急医療支援システム

茨城・栃木の技術や知見を世界へ

民間連携事業

企業の皆様とともに開発途上国の課題解決を目指します

日本の民間企業は様々な分野で優れた製品・技術・知見を有しています。これらが開発途上国で活用されることで、途上国が抱える開発課題の解決に貢献できる可能性があります。JICAの民間連携事業は、こうした製品・技術を有する日本企業の皆様の海外展開をニーズ確認調査やビジネス化実証事業等を通じてサポートし、現地の社会・経済的課題解決に貢献していくものです。

茨城県と栃木県は首都圏北部に位置し、多様で高度なものづくり産業と科学技術の集積地として定評があります。また両県とも全国有数の農業生産額を誇っています。こうした地域資源を活かしたユニークな企業が多くあることから、途上国の開発課題に貢献できる製品・技術も多くあると思われます。JICA筑波は、海外進出を検討されている企業の「経験・ノウハウがない」、「事前調査の資金や人材が不足」といった悩みに答え、現地での情報収集やビジネスモデルの策定・検証の支援を行っています。

自社の独自技術を用いて海外でビジネスチャンスを狙う

栃木県壬生町にある株式会社北研は、低温、中温、高温それぞれの温度帯に耐性があるシイタケ品種を開発しています。これらの知見を活かして、真夏に自然栽培ができる高温耐性シイタケ種菌を使った菌床をネパールで製造し、ネパール国内市場への安定供給できるような産業として育成するビジネスモデルを検討しています。将来的には小規模シイタケ農家の所得向上に寄与する本事業をJICAも応援しています。

JICAの担当者とともにネパールの現地視察を行った北研社のメンバー

タイにて園芸用有機育苗培土の現地製造を目指し、現地で土試験制作を行う株式会社関東農産（栃木県那須郡）

フィリピンにて使用済み自動車の適正処理の普及を試みる株式会社ツルオカ（茨城県結城市）

インドネシアで有効利用されていない縞タコの加工技術の普及に取り組む株式会社あ印（茨城県ひたちなか市）

共に生きる豊かな社会を目指して

外国人材受入れ・多文化共生支援

国内における地域課題解決への貢献

茨城県・栃木県は、少子高齢化や県外への人口流出による労働力不足の課題を抱えており、外国人にも就労や生活の場として選ばれることを目指しています。JICAは、これまでの開発途上国への支援で培った各国との信頼関係や人材育成のノウハウを活かし、外国人労働者の送出国の経済成長に活かす日本での就労を通じた人材育成、移住労働者の人権尊重のための働きかけ、日本国内の多文化共生支援を行っています。具体的には、JICA筑波では、茨城県や栃木県内の地方自治体、企業・民間事業者等と連携し、途上国からの移住者の方々の雇用促進のためのセミナー開催や、製造業や介護分野といった人材不足に悩む企業・民間事業者の方々との意見交換の場づくりを行っています。

このほか、自治体と連携した地域の外国人コミュニティと、行政や日本人住民との懸け橋となる人材を育成する取り組みや、外国籍の子どもの学びを促進する教材作成などに、行政や地域のNPOの方々と連携して取り組んでいます。

SDGsに取り組む地域の自治体を支援

地方創生のためには持続可能なまちづくりや地域活性化が重要であり、これらの取組みを進めるにあたってSDGsを導入する自治体も増えてきています。JICA筑波は2021年にSDGs宣言を発表した茨城県古河市と「SDGs達成に向けた取り組みを原動力とした地方創生推進のための連携覚書」を締結しました。市職員へのSDGs研修や市内のSDGsに取り組む民間企業・団体や学校らが相互に学びあえる場づくりを行政と共に行っています。

茨城県古河市とSDGsをテーマにした連携覚書を2021年に締結

茨城NPOセンター・コモンズと共催した「外国人ピアサポーター養成講座」の様子

茨城県製造業者が中小企業の魅力を伝えるセミナーをモンゴル日本センターで開催

栃木県真岡市での企業と連携した外国人向け交通安全教室、クイズ形式で楽しく学ぶ

パートナーシップとイノベーションで新たな農業協力をつくばから

農業共創ハブ・農業農村開発人材アカデミー

地の利と強みを生かし、世界の課題に挑む

JICA筑波は、ほ場、温室、実験室などの施設を有し、これまで途上国から年間約800人の研修員を受け入れ、実践的な農業研修を提供してきました。筑波研究学園都市には農研機構をはじめとしたいくつもの研究機関が拠点を有しています。その経験や様々なリソースを生かし、開発途上国の農業分野の行政官や普及員と日本国内の研究機関や民間企業などのパートナーを結び付け、途上国が抱える課題解決への貢献を共に目指すのが「JICA筑波農業共創ハブ」です。

近年では「JICA農業人材アカデミー」も立ち上げ、JICA海外協力隊候補生を対象とした農業研修や専門家ブラッシュアップ研修などを実施しています。変わりゆく多様な農業開発の課題に対応できるよう、現場を見据えた実践的な農業技術や知識を習得できる場を提供することが目的です。このアカデミーでは、国内外の農業の未来を担う農業高校や大学・大学院の農学専攻の学生を対象としたプログラムも実施しており、JICA筑波が国際協力の農業分野の人材創出・育成の拠点となることを目指しています。

世界の課題と日本の技術をつなぐ ビジネスマッチングセミナーを開催

JICA筑波の研修施設を会場に、JICA研修員と日本の民間企業とを招待したマッチングセミナー（共創セミナー）を開催しました。開発途上国から自国の課題解決のために来日・技術研修を受けている研修員たちは、参加企業がもつ農業技術・製品やサービスに多くの関心を示し、質問がとまらないほどでした。

参加した日本企業の簡易移植機デモンストレーションを見学するJICA研修員

参加企業からも「それぞれの国でこの製品のニーズはあるか？」などの質問が飛び交う

JICA専門家を対象にした、新たな技術・知識習得のための研修をJICA筑波で開催

JICA海外協力隊として派遣される候補生にも、農業技術を指導する研修を提供している

JICA筑波 施設マップ

来客用駐車場
車でお越しの際はこちらの駐車場をご利用ください。

けやき棟

けやき棟は一般公開しており、営業時間内ならどなたでもご利用可能です。
ご利用の際は1階フロントにて入館手続きをお願いいたします。

展示コーナー

【見学時間】10:00～17:00
JICAの国際協力や途上国の人々の暮らし、SDGsなどについて考え学ぶことのできるパネルや立体展示物があります。また、JICA研修員から寄贈された民族衣装や民芸品、民族楽器を手に取ってご覧いただけます。

レストラン NERICA

【営業時間帯】昼食および夕食（営業時間の詳細はJICA筑波HPにてご確認ください。）
世界各地から訪れるJICA研修員の食事情に合わせたメニューを用意しており、珍しいエスニック料理を一般の方にもお楽しみいただけます。

図書室

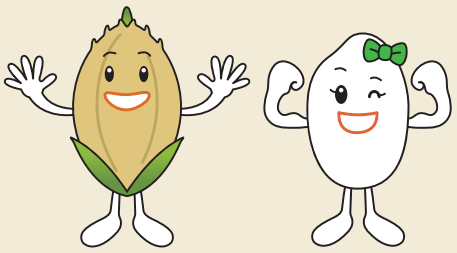
【開室時間】
平日10:00～12:00、13:00～18:00
【休室日】土曜・日曜・祝日・年末年始
国際協力・国際理解教育・SDGsについての図書やDVD、世界の絵本などをたくさん取り揃えています。どなたでも自由に閲覧が可能です（貸出は高校生以上の方に限ります）。

宿泊棟

世界各地から来日し学ぶJICA研修員のため、183室の宿泊室を用意しています。各フロアには、ラウンジ、洗濯室、給湯室、製氷機を設置しています。

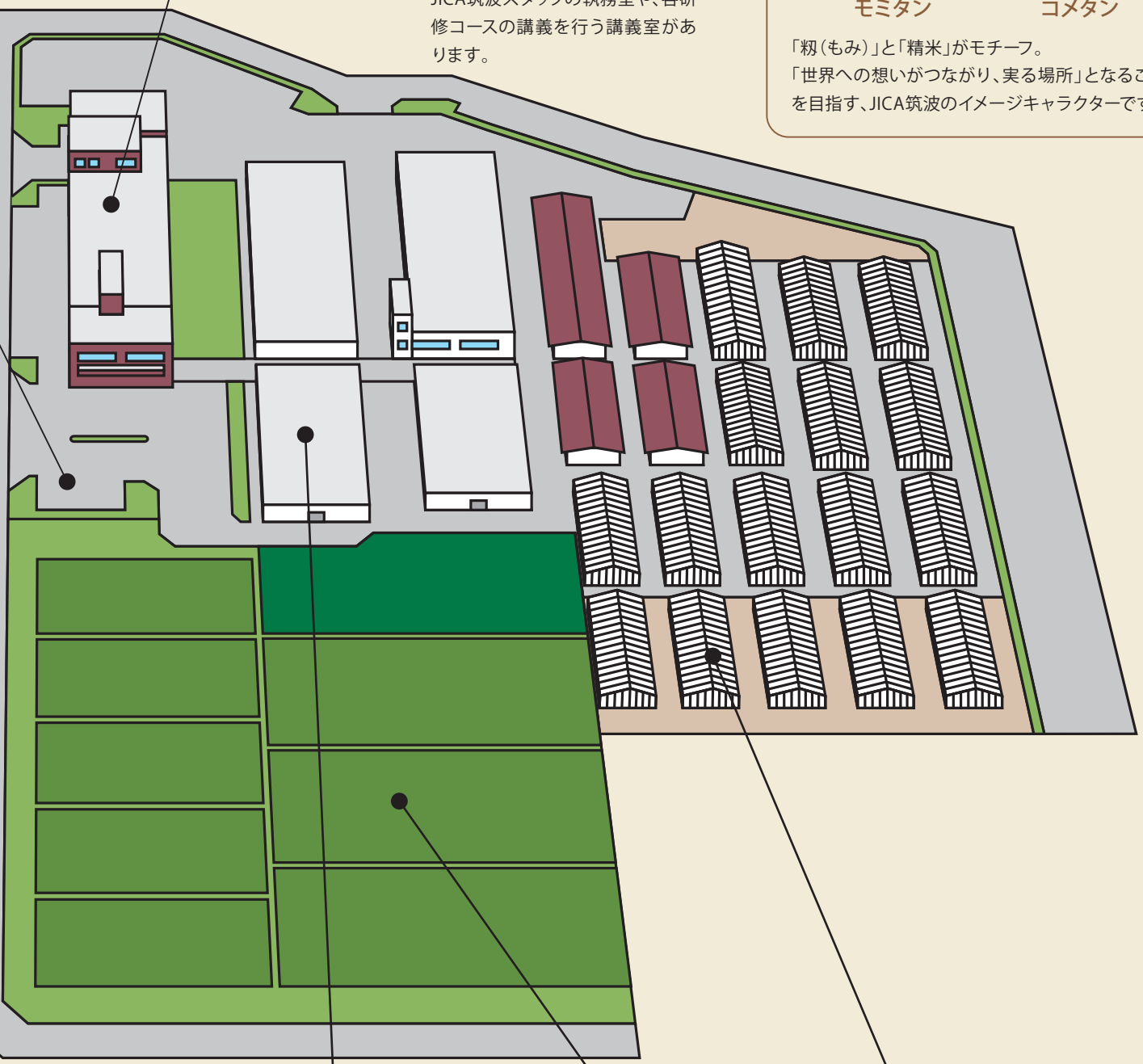
スタディ棟

JICA筑波スタッフの執務室や、各研修コースの講義を行う講義室があります。



モミタン　コメタン

「籾（もみ）」と「精米」がモチーフ。
「世界への想いがつながり、実る場所」となることを目指す、JICA筑波のイメージキャラクターです。



研修施設

4つの実習棟（かんがい排水実習棟、農業機械実習棟、野菜実習棟、稲作実習棟）と温室、ほ場（畑、水田）があります。JICA研修員が実験や実習をしながら技術を学んでいます。

実習棟

ほ場

温室

JICA筑波

PROFILE